

【体験発表1】

## 脳外科・緩和ケア医・移植コーディネーターが多重がんを生きて 「がんになってよかった!」と思い込む

富田 伸氏(脳神経外科医)



富田 伸氏

富田です。15分という与えられた時間でお話させていただきます。演題の「がんになってよかった!」と思い込む」の中、この「思い込む」のところが大切と思いましたので、こういう題をつけさせていただきました。次の窪田先生にも「私

たちは来年まで生きているかどうかわからないから、今年お話ししておこうよ」とお誘いし、二人とも医者立場でのがん体験をお話させていただくことになりました。本日お話しする機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。

家族に関し、私が大腸がん・甲状腺がん・前立腺がん・膀胱がん、妻は30年来の慢性関節リウマチであり、両側の膝、両側の股関節の置換術を行っており、四肢の運動制限が強い為、転倒による大腿骨折が数回ありました。3ヵ月前にも転んで左肘部を骨折、入院となりました。このような訳で、私も妻も身体的には強い人間ではなく、弱者の夫婦です。子供は二人の娘に恵まれ、二人とも家庭を持っており、親として

一種の安心感があります。

スライドは私の病歴です。まず下肢痛、歩行障害の治療で腰椎狭窄症の手術をしました。術後に便潜血陽性の精密検査をしているうちに、「大腸がんがあるよ」と言われ、「あれれ!」という感じでした。その後平成17年に甲状腺がん、前立腺がん、平成18年に膀胱がん、平成19年には「左肺がちょっとすりガラス様で怪しいよ」と言われ、ちょっと気になっております。この6月にPETをとりましたら、右側の肺にも気になるところがあるとの事。現在前立腺がん、膀胱がんを中心に治療しているところです。最近PSAも上昇しており、骨盤、左右肺の所見は今後どうなるのか不安に思っています。PET検査の結果、骨盤、肺に取り込みが見られるものの、脊椎と脳は今のところOKということなので、不安と一安心の混在した気持ちで一日一日を送っているというのが現実でございます。

### 10年日記に見られる心の葛藤

私は医者をして30数年やっていて、2004年に初めてがんと言われたわけです。スライドの如く私は10年日記というものをつけていました。2000年から2009年までの10年日記です。2004年にがんを告知され、2004年以降の8月3日はもう自分には無いであろうという不安で、パニックに近い精神的な動揺があったわけです。

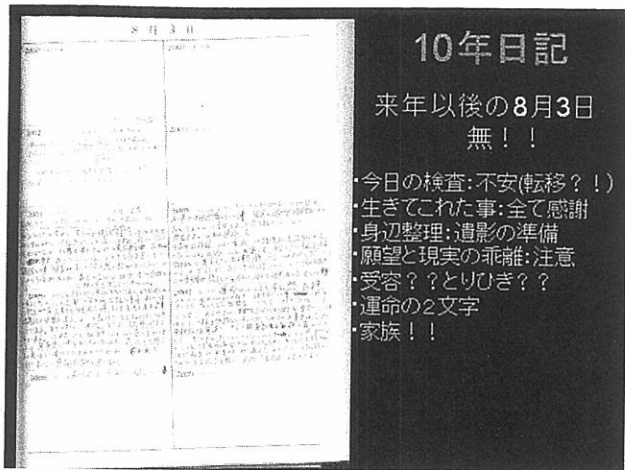
この中に書いてあることは、今日の検査はどうなるのか、転移しているのではないかな等の不安の気持ちがいっぱい書いてあります。又、これまで生きてこられた事すべてに感謝してこうと書いてあります。また、身辺整理、遺影の準備などもこれからやろうと書いてあります。私も人間ですから、自分の願望すなわち「治ったら」「癌でなければいいなー!」等の「たら」「れば」の世界があり、願望と現実の乖離に注意しよう、現実はいよいよ厳しく来るかもしれないと書いてあります。

また、現時点で死を受容しているのか、あるいは取引の段階なのか、自分の気持ちの葛藤を

**私の病歴**

- ・ H16.7月 腰椎狭窄症
- ・ 8月 大腸癌
- ・ H17.1月 甲状腺癌
- ・ 7月 前立腺癌
- ・ H18.8月 膀胱癌
- ・ H19.12月 左肺癌?
- ・ H22.6月 右肺癌!
- ・ 現在:前立腺癌、膀胱癌の治療中

PSA上昇中・骨盤転移・右肺所見...今後?!!



書いています。又、もうがんになってしまったんだからどうしようもない事であり、「運命」という2文字にすべてを任せよう。

最後に家族のありがたみ云々ということ、2004年に書いています。2005年以降の所には線が引いてあります。もう来年はないのだという一種パニック様なイメージがありました。

### いろいろな死と比較してみると…

まず私が考えたことは、パートナーないし自分の子供ががんになったらどの様に精神的に混乱したのだろうかということです。あるいは心臓とか肺とか、肝、腎、膵、小腸の病気になったら、あるいは目が見えなくなったらどうだったろうか、移植すれば治るかもしれないという状況だったらどうだろうかとか、脳死状態になったらどうだろうかとか、これらがパートナーや自分の子供の身に起こっていたら、ということを見ると、がんになったのが自分であったということで「まずはよかった」と感じました。

人はだれも必ず最後は死を迎えるわけですが、死の迎え方、すなわち死因については

### パートナー・自分の子供が！

- ・癌になったら！
- ・心、肺、肝、腎、膵、小腸の病気になったら…失明したら！  
(移植すれば助かるかもしれない！)
- ・脳死状態になったら！

自分が癌になって……

自分では決められないわけです。脳疾患で最後を迎えるのか、心臓の病気か、あるいはがんで最後を迎えるのか、がんにもいろんな種類があります。外因死ということもあるわけです。自死も含めて事故あるいは事件、内戦、紛争。アフリカはじめ世界各地では、内戦・紛争が今でも多発しております。戦争が起きればいろんな悲惨な死もあるわけです。私の死の形はどうであろうかと考えると、病死の可能性が一番高いと思っているわけです。病気による死ですから、病院に入院して、暖かい布団に包まれて亡くなる事ができるかもしれない。あるいは、自分の家の畳の上で、亡くなる事ができるかもしれない。いずれにしても、病気での死を考えると、事故・事件・内紛・戦争による死と比べると何と幸せかと思っていたわけです。

しかし、外因死で亡くなられた方と、自分の死を比較して、自分は幸せだと思うこと自体、私自身は罪の意識ないしうしろめたさを感じていたわけです。この様な気持ちの時、故柳原和子氏の著書の中「イラクの子 長崎の子の死を悼み 治療のつづくがんの幸せ」と書いてあったのです。これは一種の比較とも解釈できます。イラク・長崎の子の方たちの死の状態を考えると、自分ががんで最後を迎えられる事の幸せ。一種の比較としてとらえているのではないか。ああ、私だけではないのだと、自分に都合よく勝手に解釈し、救われた思いがした文章の一つでございます。

### まとめ

#### まとめ:癌でよかったと思ひ込む

- ①死に対する準備ができる
- ②家族・神・仏の愛と感謝を体感する
- ③一日一日の大切さを体感する  
何気ない事に幸せ感を
- ④思い出作りの貴重性
- ⑤死後でも人の為に……(角膜提供)

夢…がん体験医の会の設立

最後にまとめますと、「がんでよかったと思ひ込む」ということはどういうことか？ まず「死に対する準備ができる」ということですね。いろんな物事への考え方、すなわち家族のためにできる事を考えたり、今やらなければ悔いが残る事は何かということです。2番目に、家族、

特にパートナーのありがたさ、あるいは神・仏への愛と感謝を体感します。幾ら本を読んでも、自分の身に起こらなければ体感として感じることはできない事がありますので。この体感をしたことは、私はよかったと思ひ込んでいます。

また、3番目として1日1日の大切さを体感する、何気ないことに幸せを感じる。お茶を飲む喜び、ラーメンを食べられる喜び、あらゆることに喜びを感じられる。今、ここで自分が皆様方と一緒にこういう機会を与えられたことに、非常に幸せを感じるということです。

4番目に、思い出づくりの貴重性です。がんになりますと、ただただ、助かることだけ考えておられますが、ちょっとした旅行に行ける、あるいは外出する。そういうことの喜び、思い出の一つでも二つでも作る。こういうことができるということが、がんになってよかったと感じる点です。

また、がんになりますと死が目の前にきておりますから、1日1回は必ず死というものが脳裏をかすめます。しかし、暗いことばかりではないのだ。がんの人でも、死後に於いて人のためになれることがあります。それは角膜の提供

です。目の見えない方に、自分の角膜で光を与えることもできるのだ、と。がんで亡くなった場合、自分の身体で人のためになれることはほとんどないのですが、唯一角膜の提供だけは可能であります。それは明るいことではなからうかと思っております。

最後に、私の夢ですが、やはり医療の発展です。医療は病院を中心に、医師、看護師、あるいはそれを取り巻く全てのメディカルスタッフの方々と、患者さんとの協力のもとでやっていくわけです。あくまでも夢ですが、千葉県に「がん体験医の会」を作りたいですね。「乳がん友の会」とか、「肝がん友の会」だとか、いろんな患者さんの会があると思います。同じように「がん体験医の会」を千葉県にできたらと思っております。今日も、次の窪田先生と最低二人いるわけですから、二人集まればもう体験医の会をつくったようなものじゃないでしょうか。来年生きていれば、また一人か二人ぐらいふえてくれればありがたいな？！と思っております。来年に希望を持って生きていきたいと思っております。以上でございます。ありがとうございました。

### 富田 伸 (とみた しん)



1944 年生まれ

1970 年 東京医科歯科大学卒業後、脳外科専攻

1974 年～2010 年 3 月まで国保旭中央病院脳外科勤務

この間千葉県移植コーディネーター、緩和ケア科部長・顧問を兼任  
4 月定年退職後、聖隷佐倉市民病院・匝瑳市民病院・浅井病院で脳外科、癌患者のピアサポーターの仕事を実践している。

1991 年から東総地区の癌患者の医療の向上をめざし、千葉東部ターミナルケア研究会の代表・顧問を務めている。

癌病歴：2004 年腰椎狭窄症の手術後、便潜血陽性の検査で大腸癌が発見された。

それまで他人の死が、自分の死としてショックウェーブの如く体感した。

その後、甲状腺、膀胱、前立腺癌が連続的に発見され、多重癌患者として現在に至っている。人生四苦八苦、人生皆苦であるが、何気ない日常生活の中に幸せ感をもたらしてくれている事で、癌になって良かったと深く思い込むように努めている。

がん対策基本法の成立後、癌患者の立場からの理想の医療は何かを求めて、がん患者大集合実行委員として参加している。